

設問「形式別」

主語・述語・修飾語

今回の設問形式

「選択肢」の問題①

今回は、選択肢の問題（文学的文章）を中心に扱います。次の3つのチェックポイントを確認のうえ、文章読解に進んでください。自分のミスに自分で気づく力を養いましょう！



チェックポイント1

選択肢を「一目惚れ」で選んでいないか？

でも、「運命の出会い」って、あこがれるじゃないですか…



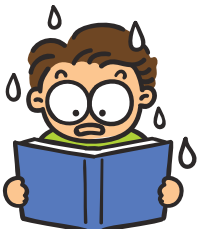
「一目見た瞬間、恋に落ちました」ということなら、「神様、素敵な出会いをありがとう！めでたしめでたし」ですが、選択肢



チェックポイント2

比喻や慣用句など表現の意味をよく考えたか？

ひゅ？
そんなの「い」ある…のね…



の一目惚れは考えものです。選択肢をさっと見て、「何となく、これ！」で決めていませんか（答え合わせをして「よし！当たった！」と叫んでいる人は、このタイプかもしれない）。主な原因は「面倒くさい」。本文はもちろん、選択肢を理解することも苦痛、設問なんか、文字を追うのもイヤ。結果として、何となく目についた選択肢を選び、解答欄が埋まって、めでたしめでたし。「面倒くさい」は解答作業の大敵です。①聞かれていることはどういうことか、②①について本文にはどう書かれているのか、③①・②から考え得る内容に最も近い選択肢はどれか、という順序で、ていねいに考えて解答に至る。この手間を惜しんでいるうちは、いくら大量の問題をこなしても無意味です。①設問②本文③選択肢という基本の3ステップを踏まないかぎり、「一か八か」の賭けに出ているのと同じ。入試は博打ではありません。

「手をかける(手塩にかける)」と「手がかかる(手間がかかる)」という慣用句はよく似ていますが意味はまったく違います。本文や選択肢に使われている表現を何となく見ているだけでは、細かな違いを見落とすこととなります。本文では「じゅうぶん^{じゅうぶん}に手をかけて子どもを育てる」という説明がされているのに、「子育てはとも手がかかる」という内容の選択肢を選んでいませんか。「手」「かかる(かける)」という同じようなことばで構成された表現なのだから、間違えても仕方がない、ということにはなりません。ことば(単語)のレベルから、きちんと意味を理解して、ていねいに読み進めていく習慣が身についていないと、紛らわしい選択肢に引っかかり放題、ということになりかねません。



チェックポイント3

「道德の畏」にはまっていないか？

だって「中学入試の国語は道德だ」って言うじゃないですか！



「けんかをして、友だちを泣かせた少年の気持ち」は、①「後悔」か、それとも②「喜び」か。「国語の選択問題では道德的に正しいものを選ぶ」という法則(?)に従うと①ですが、必ず本文の

内容と照らし合わせて、確認しましょう。もちろん、入試ですから、道德的に問題のある人ばかりが登場して、やりたい放題……という危険な作品は使えません。道德的に正しい人、正しい行動を肯定する作品が使われますが、とはいえ、人は常に理屈どおりに行動するわけではありません。道德的に良くないと分かっているのに、欲望に負けてしまうこともある。そういう、人の「弱さ」を描いた作品はたくさんありますし、そもそも、すべての選択肢が「道德的に正しい」内容だったら、選びようがありません。道德的か否かを頼りに選択肢を選ぶのはナンセンス(本質的ではない)です。



入試必勝アドバイス

「選択問題」は

思い込みを徹底的に排除しよう！



「選択肢」の問題 ①

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の風汰(ふうた) (斗羽君) は、学校の授業の一環(いっかん)で「エンジェル保育園」に職場体験に来ています。風汰は、金曜日の遅い(おそ)時間に保育園の園児である「しおん君」が一人でマンションの前(まえ)にいるのを見かけました。風汰に気づいたしおん君が、いつもとはちがうきびしい表情(へいじょう)を浮かべたことが気になって、翌日(よるじつ)の土曜日、風汰は休みの日でしたが保育園にやってきました。

「来てるよ、しおん君」

林田(はやしだ)は、おいてと風汰の腕(うで)をつかんでテラスまで出ると、園庭を指さした。

ウサギ小屋の前に、小さな背中(せなか)があつた。しゃがみこんで、小屋のぞいている。さらさらの髪(かみ)に太陽の日差しがあたつて、天使のような輪を作っている。

きりん組のあいりちゃんが「しおんくん」と駆けよると、小さな背中(せなか)が振り返(かえ)った。

笑っている。いつもと同じように、しおん君は少しはにかんだ笑顔(えがお)をあいりちゃんに向けて、なにかうなずいている。

「こっちに来て」

林田は、風汰を事務室で待たせて足早にホールのほうへ向かい、すぐに戻(もど)ってきた。

「少しなら大丈夫(だいじょうぶ)。土田(つちだ)さんもいるから」

10

5

土曜は登園する園児が少ない。その分、保育士の数もギリギリにおさえられている。今日は林田と一歳児(さいじ)クラスを担当(たんとう)している保育士、それにパートの土田(つちだ)さんの三人だ。

風汰はガラス戸の向こうに目をやった。

① 斗羽君(とば)が気(き)になること(こと)ってなに？」

あらためて問(と)われると、どう言えばいいのか戸惑(とまど)う。

言葉(ことば)にしたなら、それが現実(げんじつ)になってしまいう気がして怖い。口にしたくない。しおん君(しおん)はいまここにいる。いつも通り笑(わら)ってここにいる。

大丈夫(だいじょうぶ)なんだ。きつときつと、大丈夫(だいじょうぶ)だ。

「斗羽君(とば)、心配(しんぱい)してるんじゃない？」

「えっ？」

「虐待(ぎやくたい)、とか」

林田(はやしだ)の言葉(ことば)に、息(いき)が詰(つま)まった。胸(むね)がきゅつと締めつけられる。テレビや新聞(しんぶん)では毎日(まいにち)のように見聞(けん)きしている。もうセンサーショナルな言葉(ことば)でもなんでもない。なのに、目の前(まへ)にいる林田(はやしだ)の口(くち)からこぼれた言葉(ことば)は、まるで違(ちが)って聞(き)こえた。

息苦(いき)しいほど重(おも)く、ざらりとした感(かん)触(じよく)と冷た(ひや)さをもって、鋭(すまど)く突きつけてくる。

風汰(ふうた)は唇(くちびる)をかみ、大きく息(いき)を吸(す)った。

「わかんない」

「うん」

「だけど、やっぱヘンだ」

うん、うん、と林田(はやしだ)はうなずいた。

「……オレわかんねーけど、虐待(ぎやくたい)とかそういうの。そうじゃなくて、そういううんじゃなくて。でも、大事(だいじ)にされてんのかなって、ちゃんとあいつ」

40

35

30

25

20

15

園庭から、子どもの笑い声が響く。ガラス戸の向こうに視線を向けると、保育士がホースで散水しているところへ、泥んこになった子どもたちがキヤーカーキー言いながら近づき、保育士がその子たちにホースを向けると、声を上げて園庭を駆け回る。しおん君はニコニコしながら、その様子を園庭の隅で見ている。

「あそばせてあげたいんだよね、しおん君にもああやって、思いつきり泥んこになって」

林田がぼそりとつぶやいた。

「そういえば、しおん君が泥んこあそびをする姿を一度も見ていない。白いシャツに汚れひとつつけないで、いつもきれいで……。」

「泥んこあそびって、子どものバロメーターだと思うの」

「バロメーター？」

「泥んこになるって、最初勇気いるでしょ」

「うん」

「②心とからだ解放されないと、泥んこあそびってできないから。しおん君は絶対に土にふれようとしな。お母さんが汚れることを嫌うから。園で服を貸してあげるって言ってもダメ。お母さんに嫌われることは、したくないんだよね」

「……」

「でも、させるよ。泥んこになってあそべるようにする。いつか、絶対」

廊下から足音がして、パートの土田さんがびーびー泣いている小さな女の子の手を引いて顔を出した。

「きなちゃん転んで、おてこをぶつけて」

「あー、痛かったね」と、林田はその子を抱き上げた。

「帰る」と、風汰が事務室のドアに手をかけると、「月曜日ね」と林

65

田の声がした。
「ちゃんと来るんだよ」

園の周りを二周して、風汰は門の外側から中をのぞきこんだ。

保育園になんて行きたくない。休みたい。このまま職場体験を終わりにしたい。③しおん君の顔を見たくない。そう思って昨日一日を過ぎたのに……。

午前七時十五分。

「って、なんでオレ、こんなに早くに来てんだよ。」

(中略)

ホールの中は、「おはようございます」の音が飛び交い、入れ替わり立ち替わり、大きな袋を抱えた親子がやってくる。子どもたちは布団にシーツをかけている母親のそばでごろごろしたり、持ってきたタオルケットを首に巻きつけたりして、母親に、「やめなさい」「じゃましないの」と叱られている。それでも子どもたちは母親にまとわりついていて。おかしくならぬ、どの子どもだ。

みんな大好きなんだ、お母さんのことが。

ホールを駆け回る三歳児を捕獲して、ばんだ組に連れていこうとしていた風汰はその子を床に下ろして、崩れた布団を重ね直した。

「おはようございます」

林田の声に、今度は誰だ、とホールの入口を振り返った瞬間、どくと心臓が鳴った。

しおん君。

たたたたたたっ！ しおん君は駆けてくると、くんとあごを上げて

風汰を見た。

「おはよお」

90

85

80

75

70

「オ、オツス」

風汰が言うと、しおん君はいつものように少しはにかんだように笑い、かばんを下げたまま、並べてある布団のところへ走っていく。そのうしろから、しおん君のお母さんが表情を動かすこともなく入ってきた。

「おかあさーん、しおんのおふとんあった」

しおん君が重ねてある布団の上のつて、ひまわりマークの布団を引っぱる。

ひまわりは、しおん君のマークだ。

お母さんは表情を変えずにしおん君のところまで行くと、ぴしゃつと足を叩いた。

「あつ」

風汰は思わず声をもらした。

「布団の上のつていいの？ いけないの？」

しおん君はびくつと硬直して、あわてて布団から下りる。「これ」と、ひまわりマークの布団を指さすしおん君を一度見て、お母さんは周りの布団を整えはじめた。

「どうしていつも余計なことばかり」

④「お母さん大丈夫ですよ」

林田が足早にやってきて、お母さんの隣にしゃがんだ。

「マークが見えていけばわかりますから」

「こういうことはきちんとしないと。あの子はなにをやらせてもいい加減なんです。面倒なことはばかりするんです」

形のいい口元をゆがめるお母さんに、林田はゆっくり息を飲みこむようにして笑った。

⑤「お母さん。しおん君はいい子です。すごくいい子です。大丈夫で

115

すよ」

お母さんは立ち上がると、黙って布団を広げた。しおん君がカバンからシーツを取り出して、「はい」と手を伸ばす。あごを上げてお母さんを見上げる。笑顔だ。

そんなしおん君から、お母さんは視線をそらして手早くシーツをかける。なにも言わず、ホールを出ていった。

「おかあさーん、いつてらっしゃい」

あとを追いかけて笑顔で手を振っている。そんなしおん君の小さくて薄い肩に、林田がそつと両手をあてた。

風汰は、しおん君と、しおん君のお母さんの背中を見つめた。

（振り返ってくれよ。頼むから。一度、一瞬でいいから、しおん君に手を振ってやってよ）

お母さんの姿が廊下の向こうに消える。でもしおん君はじつと、廊下を見つめている。

「なんだよ、なんてだよ……」

⑥「こんなの、だめだ」

風汰は、しおん君の手を握って廊下を走った。はだしのまま玄関から飛び出すと、ヒールを鳴らして歩いていく背中に向かって叫んだ。

「いつてらっしゃーい！ いつてらっしゃーい！ しおん君のお母さん！」

お母さんが立ち止まる。

⑦「しおん君が、つないでいる風汰の手をぎゅつと握った」

「おかーあさーん」

しおん君が大きな声で叫んだ。

その瞬間、お母さんはびくつとしたように振り返った。

「おかーあさーん、いつてらっしゃーい」

140

110

105

100

95

130

125

120

ぐっと伸び上がり、しおん君は大きく何度も手を振った。

午後のおやつが終わると、園長がきりん組にきた。

「お疲れさま。五日間、どうだった？」

「すげー大変だった」

「あら」と、園長はおかしそうに笑って、それからゆっくりうなずいた。

「子どもたちにちゃんと向き合ってくれて、ありがとう」

べつに、と風汰が意味もなくからだを動かすと、頭の上で結わえた前髪がびよこびよこ揺れた。

「みんなすげーって思った」

「そう」

「うん。すげー」

「そうね、しおん君も」

風汰はこくんとうなずいて、「うそつきだけどね」とつぶやいた。

あいつは、しおん君はうそつきだ。お母さんが好きで、笑った顔が見たくって、愛されたくて、嫌われたくなくて、困らせたくなくて、そばにいてほしくて。

だから、笑ってる。寂しくても、悲しくても、好きなあそびができなくても、平気だよって笑っている。

苦しいほど素直で、正直で、うそつきだ。

だけど、ううん、だから⑧そのうそは、誰かがちゃんと見つけてあげなきゃいけない。

「ふーたーくん！」

園庭から子どもたちの声が聞こえる。泥んこの中で、早く早くと手を振っている。風汰は手を振り返して園庭に出た。

165

青空に向かって大きく伸びをした。

パソコン！

「いてっ」

尻に手をあてると、甲高い声が背中であいた。振り返ると、新聞紙を丸めて作った刀を振り回しながら三つの小さな背中が、クスノキの向こうにひよいと消えた。

—— エンジェル保育園

屋根の上にある看板に目をやって、苦笑した。

ウサギ小屋の前へ行くと、しおん君がまぶしそうに風汰を見上げた。

金曜の夜とはまったく違う。あのときのことなんて忘れてしまったように笑っている。

しおん君はパッと立ち上がると、⑨「あげる」と、クローバーを差し出した。四つ葉じゃなくて、普通の三つ葉のクローバー。風汰の手に、しおん君がクローバーをのせた。

やっぱり小さいな。小さいけど、強い。

しおん君は強い子だ。だけど、本当はもともと弱くていい。四歳じゃん。たった四つ。びーびー泣いて、わがまま言って、甘えていい。それで、ちゃんと守られて。

「サンキュ」

オレはなんにもしてやれない。なにかしてやれるほど、大人じゃない。なにが正しくて、なにをすることがこいつのためになるのかもわからない。守ってやる力なんてない。

⑩ だいたいオレ、アホだし。

でも、いまこの瞬間にしてやれることだったらわかる。

いまできることは、笑って、しおん君が握ってきた小さな手を、し

190

185

180

175

170

かもしれないという恐怖感があったから。

2 風汰のこのような気持ちを察していることがわかる林田先生の言葉を、文章中から十字程度でぬき出して答えなさい。

問四 — 線④「お母さん大丈夫ですよ」、⑤「お母さん。しおん君

はいい子です。すごくいい子です。大丈夫ですよ」とありますが、

1 林田先生のこれらの言葉から、しおん君のお母さんについてどのようなことがわかりますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもに対する愛情が全くなく、息子に面倒をかけられることを心底いやがっている。

イ 手間のかかる息子をもってしまったことで、子育てに対して悲観的になっている。

ウ 子どもをきちんと育てなければいけないと必死になるあまり、息子を思いやる心の余裕がない。

エ 本当は深く息子を愛しているが、人前では恥ずかしくてそれをうまく表現することができない。

2 これらの言葉から、林田先生のどのような気持ちを感じられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもを厳しくしつけるだけでなく、息子に伝わる形で愛情をかけてもらえるように促したい。

イ しおん君は立派に育っているのだから、育児の仕方には何の問題もないと伝えたい。

ウ 保育園に預けているかぎり心配は不要なので、もっと気楽に子育てをしても良いのだと教えたい。

エ しおん君は母親のために頑張っているのだから、もっと子ども

をもほめて母親の優しい愛情を注ぐよう注意したい。

問五 — 線⑥「こんなの、だめだ」とありますが、なにが「だめ」

なのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア しおん君の母親がわがままな息子に腹を立て、しおん君に冷たい態度をとったまま出かけてしまうこと。

イ 風汰の心配が的中し、しおん君親子の抱えている問題を解決できないまま職場体験が終わってしまうこと。

ウ しおん君親子のお互いを思う気持ちが伝わらず、相手のことを誤解してすれ違ったままになってしまうこと。

エ 母親を慕うしおん君の気持ちが届かず、しおん君が母親の愛情を感じられないままになってしまうこと。

問六 — 線⑦「しおん君が、つないでいる風汰の手をぎゅっと握つ

た」とありますが、このときのしおん君の様子の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母親に自分の気持ちを伝えてくれた風汰のことを信頼し、力を貸してくれた風汰に感謝の気持ちを伝えようとしている。

イ 風汰の突然の行動に面食らい、母親が仕事に行く邪魔をするようなことはしないでほしいと風汰を止めようとしている。

ウ なりふりかまわず気持ちを表現した風汰の様子に驚き心を動かされ、思わず母親への思いがあふれ出しそうになっている。

エ してはいけなと言われているのに母親の後を追いかけて来たことを反省し、立ち止まった母親に怒られると緊張している。

問七 — 線⑧「そのうそは、誰かがちゃんと見つけてあげなさい

けない」のはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問八 — 線⑨ 「『あげる』と、クローバーを差し出した」ときの、「クローバー」に込められたしおん君の気持ちを文章中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問九 — 線⑩ 「だいたいオレ、アホだし。／＼でも、いまこの瞬間に
してやれることだったらわかる」とありますが、風汰は「アホ」
なのになぜ「わかる」のだと考えられますか。最も適切なものを
次から選び、記号で答えなさい。

ア 何が正しいかはわからないが、わからなくても生きていけるこ
とを知っているから。

イ 物事をいい加減に考えて、わかったつもりになって満足してい
るから。

ウ 深く考えることはできないが、たまたま勘が当たっていること
もあるから。

エ 理屈ではなく直感的に、人として大切なことが何かを感じるこ
とができるから。

問十 — 線⑪ 「風汰はもう一度、さつきより高く、大きく、しおん
君を青空に向かって抱き上げた」とありますが、このときの風汰
の気持ちとして適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。
ア しおん君にだいたいすきだと言ってもらえたことがうれしくて、そ
の気持ちに応えられるような立派な大人に成長したい。

イ しおん君の背負っている苦しみが少しでも軽くなり、本来の子
どもらしい伸び伸びとした心を取り戻していつてもらいたい。

ウ これからは自分が守っていくと伝えることで、自分勝手な母親
に嫌われて落ち込んでいるしおん君を安心させたい。

エ 自分もしおん君のことが大好きだという気持ちを行動で示すこ
とで、愛情は相手に届くし自分にも返ってくると思いたい。

オ どんな逆境にあっても常に明るく笑顔でふるまう強くて優しい
しおん君のことを、ひそかに尊敬している気持ちを表したい。

文法の知識①

主語・述語・修飾語

● シリーズ6年上第1回・第2回、「四科のまとめ」P.70～74参照。

問一 次の各文に／を入れて文節に分けなさい。(4年上第11回)

- 1 桜の花が美しく咲いた。
- 2 冬休みには山寺にこもって修行する。
- 3 山頂にそびえる塔は天を刺す剣のように見えた。
- 4 仕事を終えた石工たちが険しい峠を越えて帰ってくるようだ。
- 5 本堂の裏の小屋に集まった子狸たちは経を唱えながらゆつくりと地藏菩薩に化けるそふだ。

問二 次の各文の——線部の言葉は、それぞれどのような働きをしていますか。後のア～ウから選び、記号で答えなさい。

- 1 金太郎は最初からやる気が出なかつたのでぶらぶらしていた。
- 2 責任を果たそうとする金次郎の立派な態度は賞賛された。
- 3 グラスの割れる鋭利な音がパーティ会場に響きわたつた。
- 4 第一志望校に合格するために私は必死で勉強をした。
- 5 紫色に輝く川には大きな魚がゆらゆらと泳いでいた。

ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語

問三 次の各文の主語と述語を、それぞれ記号で答えなさい。各文の

主語・述語がない場合は、×で答えなさい。(6年上第1回)

- 1 アばくはイ毎日ウバットのエ素振りをオ千回カします。

- 2 アなんてイ美しいんだ、ウ庭にエ咲いたオ薔薇のカ花は。
- 3 アいろいろとイ文句をウ言っていたエ父もオ母がカ焼いたキケーキをウ食べた。

- 4 ア今日はイいつものウ倍ぐらいエ練習をオしてカ疲れたのでキ食事をウ終えたらケすぐコ寝るよ。

- 5 ア世がイ乱れたウ今、エ弥次郎兵衛こそオこのカ村のキ民をウ救うケカをコ持ったサ人間だ。

- 6 ア夜明け前にイ村外れのウ地藏堂にエいたオ座敷わらしはカ夜がキ明けてからウいったいケどこに。

- 7 ア村人のイ多くがウ反対するエ中、オ兄だけカ峠をキ越えてウ野盗のケ館にコ足をサ運んだ。

- 8 アおや、イ弥次郎兵衛さん、ウこんなエ夜更けにオそんなにカ急いでキどちらへウいらっしやるんです。

- 9 ア仲間のイみんながウ楽しそうにエ話していれば、オいくらカ欲のキないウ金次郎だってケ宝島にコ行ってみたいとサ思うよ。

- 10 ア空のイ上からウ見るとエダイヤモンドのようにオきらめくカ街をキ囲むウ真っ黒なケ海のようにでした。

問四 次の各文の——線の文節が修飾している文節を、それぞれ記号で答えなさい。(5年上第11回・5年下第11回・6年上第1回)

- 1 白いア大きなイ犬がウ公園でエ散歩していた。

- 2 ほとんどア彼のイ意見にウ反対するエ人はオいなかった。

- 3 ア警報がイ鳴るとたちまちウ劇場にエいたオ観客がカ非常

ロへ キ おしかけた。

4 おそらく ア 遠くに イ 聞こえた ウ あの エ 汽笛は オ 夜行列車の
カ 汽笛だろう。

5 座敷ざしきわらしらしい ア はかなげな イ 小さな ウ 影かげが エ 山寺の オ 鐘かね
を カ 鳴らしていた。

6 ア もう イ 取り返しは ウ つくまい、 いまさら エ 王様が オ 自分の
カ 愚かな キ 行いを ク 深く ケ 悔いても。

7 ひたすら ア 職人が イ 木を ウ 加工する エ 仕事に オ 打ちこんで
いる カ 姿を キ 見て、 ク とても ケ 感動した。

問五

次の各文は、どれも表現が適切ではありません。適切でない理
由を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 私の実力ではとうていAに負けるだろう。
- 2 今日はすごい寒いから、厚いコートが必要だ。
- 3 その店員はそつと近づいてきた人に声をかけた。
- 4 私の夢は建築家になって立派な家を建てたいと思っている。

〈理由〉

- ア 主語と述語が正しく対応していない。
 イ 修飾語の形が修飾される語に正しく対応していない。
 ウ 修飾語がどこにかかっているかがはっきりしない。
 エ 打ち消しの表現を必要とする修飾語が、打ち消しがな
 のに用いられている。

問六

次の文中の（ ）内のア～エの言葉を意味が通るように正し
く並べかえ、記号で答えなさい。

・休みの（ア）片付けようと / イ たびに / ウ 思いな
がらも / エ 今日こそ（ ）実際にはなかなか実行できない。

問七

例にならって、次の1・2について、それぞれの条件を満た
した短文を一文で作りなさい。なお、言葉の順番を変えたり、
活用させたりしてもかまいません。

例 「ためらう」「きらびやか」を使い、主語・述語の整った文。

答 姉があまりにもきらびやかな服で現れたので、私はいっし
よに出かけるのをためらった。
（述語） （主語）

- 1 「必ずしも」「人間」を使い、主語・述語の整った文。
- 2 「むしろ」「たよる」を使い、主語・述語の整った文。